本格的な登山シーズンの幕開け

県内のトップを切って室根山で山開き

登山客の安全と観光客の来訪を願う室根山の山開きは、4月19日に行われました。蟻塚公園で行われたセレモニーには、登山愛好家、地元の自然愛護少年団、関係者ら約300人が参加。テープカットの後、一斉に登山が行われました。

途中の室根神社では安全祈願祭が行われ、標高895㍍の山頂で万歳三唱が行われました。

イベントに参加した鈴木天智くん（室根西小6年）は「急な坂道があったり、すべるところがあったりしてきつかった。山頂の景色は最高。また登ってみたい」と元気に話してくれました。同日はきらら室根山天文台もオープンしました。

県南の拠点駅としての発展を目指して

岩手の窓口 一ノ関駅の開業125年目を祝う

JR一ノ関駅（菅伸二駅長）の開業125周年記念イベントは4月18日、同駅西口広場で開かれ、菅駅長と来賓がくす玉を開いて節目の年を祝福しました。愛心幼稚園の園児が愛らしい合唱を、一関二高太鼓道場部と二代目時の太鼓顕彰会は力強い太鼓をそれぞれ披露。駅舎二階から振る舞われた「お宝まき」では、勝部修市長らが餅や曲りねぎなどをまき、詰めかけた住民を楽しませました。

末広から訪れた高橋禮子さん(74)は「にぎやかなイベントが増えるといいですね」と笑みを浮かべました。同駅は1890年（明治23）に開業。1982年には新幹線が運転を開始しました。

アースデイに合わせ地球環境を考える

親子で楽しく地球儀作りに挑戦

地球っ子広場・ピースらんど（細川光司、公子コーディネーター）が主催する「地球儀を作ろう」は4月19日、東山町の石と賢治のミュージアムで開かれました。同団体は、生命の尊厳や平和について考える取り組みを続けています。

地球環境を考える「アースデイ」に合わせ、親子連れ11人が地球儀を自作。のりをつけた新聞紙を風船に貼り付けました。登米市から訪れた瀧澤詩織さん（石森小3年）は「新聞紙を平らに貼るのが大変でした。出来上がりが楽しみ」と笑顔を見せました。同団体は、川で遊ぶイベントなど、年間を通し、石と賢治のミュージアムで活動しています。

第9回チェリーロードまつりで約400人が記念撮影

60余年親しまれた桜並木との別れ惜しむ

信金本店大通り振興会が主催する「第9回チェリーロードまつり」は4月19日、磐井川河川公園山目側で開かれ、市内外から集まった約2,000人が桜並木との別れを惜しみながら春の風物詩を楽しみました。

堤防沿いの桜並木は今年で見納め。堤防の改修工事に伴い、年内に伐採されることが決まっています。サクラは、昭和22年のカスリン台風、23年のアイオン台風による水害からの復興を願って一関ライオンズクラブが植樹。以来、60年にわたって市民から愛されてきました。記念撮影会には、約400人が参加。満開の桜並木を胸に焼き付けていました。

第22期緑のふるさと協力隊員に西田さんが着任

大東町大原の下内野地区で1年間活動

NPO法人地球緑化センターの第22期緑のふるさと協力隊員の委嘱状交付は4月10日、市役所で行われ、東京都八王子市出身の西田彩音さん（23）が着任しました。

西田さんは2014年3月に大学を卒業。昨年、同法人の短期プログラム「若葉のふるさと協力隊」で市内達古袋地区を訪れました。4月からは大東町大原の下内野地区で1年間、農業や地域行事などさまざまな活動に取り組みます。西田さんは「積極的に行事に参加し、自然豊かな地域に早く溶け込みたい」と抱負を話しました。本市に緑のふるさと協力隊員が派遣されるのは、今年で5回目です。

地域の特性を生かした活動の拠点として

各地域で市民センターがスタート

市内の公民館は4月1日、市民センターに移行し、各地で開所式が行われました。一関市民センター（土方和行センター所長）の開所式では、同センター職員をはじめ、地元の住民らが出席。玄関に設けられた看板を除幕し、学びと地域づくりが一体となった拠点施設のスタートを祝いました。勝部修市長は「公民館が果たしてきた機能を生かし、より良い地域となるよう、理解と協力をお願いしたい」というメッセージを寄せました。

公民館が行ってきた事務や事業は市民センターに引き継がれます。

買い物客とのふれあいの場

家族連れが商店街でイベント満喫

「せんまや夜市」（千厩夜市実行委員会主催）は4月11日、千厩町の本町・新町商店街で開催されました。

日中に降り続いた雨も午後6時の開会の花火と同時に上がり、多くの市民が会場に詰めかけました。

イベントでは、一関市消防団のまとい振りやラッパ隊が集結。手に汗握るはしご乗りが披露されると、見守っていた観客から大きな拍手が沸き起こりました。恒例の出店や盛岡市出身のヴァイオリンシンガー絵美夏のライブなどが行われ、大いに賑わいました。昭和57年から始まった「せんまや夜市」は4～10月までの毎月第2土曜日に開催。次回で通算250回を迎えます。

乾シイタケ生産再開へ向けた第1歩

産地復興を願い生産者らが種駒を植菌

原木乾シイタケ生産再開記念式典（JAいわて平泉、同椎茸部会主催）は4月3日、大東町のJA東部園芸センターで行われ、生産者、関係団体など約100人が出席しました。

佐々木久助椎茸部会長は「自信を持ってシイタケを出荷できるようにしたい。今日は生産再開への第1歩」と述べました。

勝部修市長は「出荷まで3年ほどかかる。生産者の皆さんはリスクを負ったスタートとなる。希望を捨てずに頑張ってほしい」と激励。続いて行われた植菌作業では、興田中の卒業生らが産地の復興を願いながら洋野町大野産の原木に種駒を力強く打ち込みました。